

# 日独イディオム比較・対照

## — 「耳」と“Ohr”を構成要素とするイディオム表現 —

植 田 康 成

【キーワード】 日独対照・イディオム・Faux amis・イメージ・コノテーション

**Der bis über beide Ohren verliebte Radio- und Fernsichttechniker Armin-Michael** flüstert seiner Annette zu: “Spürst du, wie zwischen uns die Wellen hin und her gehen - wie im Äther. Ich bin der Sender. Und du bist der Empfänger.” Resolut bringt ihn Annette in die Wirklichkeit zurück: “Und in neun Monaten kommt ein Lautsprecher.” (Krüßmann/Hoppe 1999: 100)

(アネットにぞっこの電気技師アルミン・ミハエル：「宇宙空間を行き交う電波が二人の間にも行き来しているのがわかるかね？ほくが送信機で、きみが受信機だよ。」全く冷め切っているアネット：「そして9ヶ月したら拡声器がやってくること、忘れていないでしょうね。」)

### 0 はじめに

耳、すなわち聴覚が人間の言語活動に深く関与していることは、いうまでもない。人類は、その進化の歴史において、コミュニケーション手段として、聴覚に依拠する道を選択した。取り込む情報量の点からいえば、はるかに視覚が優れているにもかかわらず、である。聴覚に依存する利点は、相手が見えない場合、すなわち暗闇や壁越しでもコミュニケーションが可能な点にある。視覚に比較すると相対的にコミュニケーション可能な範囲は小さくなるとは言えるが。

人間言語は、そういう意味において、初原的には音声言語である。書き言葉は、音声を写し取るべく発明されたものであり、人間言語の歴史において極めて最近の出来事である。しかも、その書き言葉は、言語の展開の中で、発音と表記が大きくずれるというのが通常である。

本論文では、人間の言語活動において中心的な役割を果たしている身体器官である「耳」と“Ohr”に関して、どのようなイディオム表現があるのかを、日独両言語のイディオム辞典から収集し、比較・対照することを試みる。そしてその比較・対照に基づく考察から、ドイツ語イディオム学習・教授法に関する何らかの示唆を引き出すことが目標である。

## 1 資料源について

### 1.1 日本語の資料

日本語における「耳」を構成要素とするイディオム表現は、尾上兼英編『成語林』（旺文社刊）

(尾上(編)1992)から収集した。その数は【資料1】としてリスト・アップした81である。『成語林』による意味の説明も書き写してある。日本語のイディオム表現についても学習しなければならないという考えからである。厳密にいうならば、81の表現の中には、ことわざも含まれている。しかし、比較・対照するドイツ語のイディオム表現を拾い出した『ドゥーデン ドイツ語イディオム辞典』がことわざ的な表現も収録しているということ、日本語においてはことわざ表現を短縮してイディオム的に用いる場合も多いということ、そして資料源を特定して比較・対照する方が数値的に信頼できるという、3つの理由から、あえてことわざ表現とイディオム表現を分離することなく、拾い出した表現すべてを資料とすることにした。おそらく編者も慣用表現という語をそのようにいくらか緩やかに理解していると考えられる、というのも、もう一つの理由である。

## 1.2 ドイツ語の資料

ドイツ語における“Ohr”を構成要素とするイディオム表現は、『ドゥーデン ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992: 525-529)から拾い出した。その数は【資料2】としてリスト・アップした71である。筆者による日本語訳を付してある。1.1.節で述べたように、71の表現にはことわざ的な表現も含まれている。

## 2 資料の分析

### 2.1 日本語

#### 2.1.1 形態・統語論的分析

形態的に見ると、「耳」が単独で構成要素となっているものと、それ以外に分かれる。

まず「耳」が単独ではなく、他の要素と一緒に出現しているものは、12ある。「耳搔き」のように複合語となっているもの(耳搔き、耳朶)、「耳順」のように漢文読みから来ているもの(耳順、耳聞)、「聞く耳」のように連体修飾語が付加されているもの(聞く耳、地獄耳、長い耳、左の耳、後ろの耳、馬の耳)、耳と目が並列されているもの(耳目)がある。「馬の耳」と「耳目」は、それぞれ2つずつ上がっている。最後者は「耳目となる」「耳目を驚かす」の2つが上がっている。「馬の耳」だけが例外で、それ以外はすべて人間の「耳」を意味している。

次に、「耳」が単独で構成要素となっているものは69あるが、統語構造で分類すると次のようになる。伴われている助詞を見ると、「が」「で」「と」「に」「の」「は」「を」「から」「より」の9つがある。1) 助詞「が」を伴うもの: 「耳が痛い」等5つある。2) 助詞「で」を伴うもの: 「善い事は耳で聞かず心で聞け」「耳搔きで集めて熊手で搔き出す」の2つである。3) 助詞「と」を伴うもの: 「耳目となる」「賢者は長い耳と短い舌を持つ」の2つである。4) 助詞「に」を伴うもの: 「耳に当たる」等23ある。5) 助詞「の」を伴うもの: 「耳の正月」、「耳の楽しむ時は慎むべし」の2つであるが、後者は古い表現であり、現代語では「耳が」となり1)に含まれることになる。しかし、ここではあくまでも辞典に載っている表現形式で分類しているので、別のグ

ループに属することになる。6) 助詞「は」を伴うものは、「耳は聞き役、目は見役」など4つあるが、この4つはすべて諺であるといえる。7) 助詞「を」を伴うもの: 「耳を洗う」「耳を疑う」等24ある。8) 助詞「から」を伴うものは「右の耳から左の耳」「目から入って耳から抜ける」の2つである。9) 助詞「より」は、「から」の古い形であるが、これも「の」について述べたのと同じ理由で、別のグループとして扱う。「耳より入りて口より出ず」の1つである。10) 「耳従う」のように漢文読みしているため、助詞を伴わないものが、11ある。これには、「壁に耳あり」という形のものが5つある。この形は「壁に耳」という形でも載っている。

### 2.1.2 意味論的分析

「舌」や「口」は、人間の生存にかかわる摂食行動や、呼吸活動にとってなくてはならない。そういった機能が本来の機能であり、一次的機能と呼ぶことができる。そして、ことばを発する活動にかかわる機能は、本来の働きとは別の、いわば二次的機能である。摂食器官、呼吸器官をついでに利用しているのである。「耳」は、しかし、聴覚器官としての存在意義しかもっていないといえよう。

また、「耳が痛い」という表現についていうならば、それは字義通りの意味と、比喩的な意味の両方をもっている。「耳が痛い」がイディオム表現であるということならば、その2つの意味を有していることは、イディオム表現の性質として当然のことである。

しかし、中には比喩的な意味、つまりイディオム表現としての意味しか持っていない、字義通りの意味はもはや持っていない表現もある。たとえば、「耳が早い」「耳を澄ます」などは、字義通りの意味は持っていない。「耳が早い」は、「物音やうわさなどをすばやく聞きつける」、つまり聴覚能力そのものというよりも、情報収集能力がすぐれているという意味であり、そのような意味しか持っていない。「耳を澄ます」は、「心から聞き入ろうとする」(学研)<sup>1)</sup>、すなわち精神を統一し、集中して聴くという意味である。

字義通りの意味でも理解できる表現に出現している「耳」については、当然のことだが、身体部位としての「耳」を意味している。「耳を塞ぐ」は、イディオム表現としては「手などで耳を塞いで聞こえないようにする」という意味を持っているが、実際にその動作をおこなうことが可能である。そのようないわば身体動作がイディオム表現となっているものについては、その動作をおこなうことができるかどうかを問題にすることができる。しかし、イディオム表現として使用される場合は、耳を覆う仕草を思い浮かべるであろうが、実際にその仕草をするかどうかは、問題にはならない。たとえ「手などで耳を塞ぐ」という具体的な仕草を思い浮かべるとしても、イディオム表現としての「耳を塞ぐ」に出現している「耳」は、聴覚能力を意味していると考えることができる。つまり、「聴覚能力を遮断して聴かないよう、聞こえないようにする」(学研)という意味になる。

従って、イディオム表現としての意味について考える際には、字義通りの意味で身体部位を意

味する「耳」は、除外して考えざるをえない。しかし「耳搔き」における「耳」は、身体部位としての「耳」そのものである。また「耳朶」における「耳」も身体部位としての「耳」であり、「耳朶」が換喩的に「耳」を意味しているのである。「耳目となる」における「耳目」は、字義通りの意味で使われている。

以上の考えにもとづくなれば、「耳」を構成要素とするイディオム表現を分析するための意味論的観点については、次の4つが考えられる。まず、その身体部位としての「耳」そのものを指す場合(a)、「耳」が換喩的に「人間」全体を意味している場合(b)、聴覚器官「耳」が関与している聴覚能力そのものだけを意味している場合(c)、さらに聴覚能力から意味が拡大されて「判断能力あるいは精神、人格」を意味する場合(d)である。いずれにおいても、「耳」が身体の一部であり聴覚器官であるということは自明の前提とされる。

『成語林』から収集した81のイディオム表現をこの4つの観点に従って分類した結果を数値で示すと、(a)=17(21.0%)、(b)=10(12.3%)、(c)=30(37.0%)、(d)=24(29.6%)となっている<sup>2)</sup>。身体部位としての「耳」が登場するのは、そのほとんどがことわざ的な言い回しである。イディオム的な言い回しに登場する「耳」は、転義的な意味を持っている。「耳」が聴覚器官であることから、「聴覚能力」、そしてそれから拡大された「判断能力、精神、人格」を意味する場合が54(66.6%)を占める。換喩的な意味を持つ場合が、10あるというのが、興味深い。

### 2.1.3 語用論的分析

語用論的分析の観点には3つを設定することができるだろう。まず、当該のイディオム表現がポジティブな意味、価値判断を伴って使用されるか(+)、ネガティブな意味、価値判断を伴って使用されるか(-)、あるいはポジティブ、ネガティブ両方の意味、価値判断を伴って使用されるのか(±)というものである。その3つの観点に従って分類した結果を数値で示すと、ポジティブな意味、価値判断を伴って使用される表現は6、ネガティブな意味、価値判断を伴って使用される表現は39、ニュートラルな意味、価値判断を伴って使用される表現は36となった。ポジティブな意味、価値判断を伴って使用される表現がきわめて少ないということが目立つ。たとえば、「耳が肥える」「耳に入れる」「耳の正月」「耳を肥やす」「耳目となる」「賢者は長い耳と短い舌を持つ」といったものである。ネガティブな意味、価値判断を伴うものが多いが、たとえば、「耳が痛い」「耳が遠い」といったものである。ニュートラルな意味、価値判断を伴って使われる表現とあわせて75という数になり、「耳」に関するイディオム表現のほとんどはネガティブな表現である。

## 2.2 ドイツ語

### 2.2.1 形態・統語論的分析

資料源とした『ドゥーデン ドイツ語イディオム辞典』の“Ohr”の項の記述内容を検討すると、ある原理に従っていることがわかる。まず、最初は、“Ohr”が単独で出現している表現があげら

れている。(2-1)<sup>3)</sup>は、述語名詞として使われる表現である。(2-2)は、主語として使われる例である。(2-3)-(2-24)においては、付加語形容詞を伴う場合も、単独の場合もあるが、動詞の目的語となっている場合である。(2-9)と(2-10)は、前置詞句を伴っているので、他の名詞とともに出現している。(2-26)-(2-49)は、前置詞を伴って使われる場合である。伴われる前置詞は、“auf”, “für”, “hinter”, “in”, “mit”, “über”, “um”, “zu”がある。(2-50)-(2-71)は、他の名詞とともに出現している場合である。

“Ohr”が単数か、複数であるかは、明確な基準とはなっていないように思われるが、単数形で現れている表現は19である。それ以外は、複数形で現れている。単数形で現れている表現のうち、(2-27)は、複数形でも可能とされている。(2-41)は「片方の耳で」とあるので、当然に単数形となる。(2-49)と(2-62)は、「一方の耳からもう一方の耳へ」というわけであるから、単数形が出現しているが、全体では両方の耳が関与することになる。(2-67)と(2-71)は、複数形でもいいと思われるが、「悪魔の耳」「神様の耳」ということで、単数形となっている。“Ohr”が単数形となっているそれ以外の表現13のうち、(2-1)をのぞいて、のこりはすべて「判断能力、精神、人格等」を意味しているということが、きわめて興味深い。(2-1)と(2-41)は、「聴覚能力」を意味している。

### 2.2.2 意味論的分析

『ドゥーデン ドイツ語汎用辞典』(Duden Deutsches Universalwörterbuch) (DUDEN 2001: 1159)の“Ohr”に関する意味記述を検討した結果、ドイツ語の“Ohr”を構成要素とするイディオム表現についても、日本語の「耳」を構成要素とするイディオム表現について設定した4つの観点から、意味論的に分類していくことが可能と考える。その4つの観点から、ドイツ語の“Ohr”を構成要素とするイディオム表現を分類した結果は、(a) = 33 (46.5%)、(b) = 5 (7.0%)、(c) = 10 (14.1%)、(d) = 32 (32.4%)となる。

### 2.2.3 語用論的分析

イディオム表現が、ポジティブな意味、価値判断を伴って使用されるか(+)、ネガティブな意味、価値判断を伴って使用されるか(-)、あるいはニュートラルな表現として使用されるのか(±)、という点から分類した結果は、(+): 14 (19.7%)、(-): 32 (45.1%)、(±): 25 (35.2%)となる。ポジティブな表現としては、たとえば“die Ohren steif halten” (2-6)といったものである。ネガティブな表現の例としては“vor jmdm. seine Ohren verschließen” (2-11)をあげることができる。ニュートラルな表現には“auf seinen Ohren sitzen” (2-25)といったものがある。

## 3 分析に基づく比較・対照

以上の日独両言語の「耳」と「Ohr」を構成要素とするイディオム表現に関する形態・統語論、意味論、語用論の各レベルにおける分類、観察結果にもとづいて、ドイツ語学習とりわけドイツ

語のイディオム学習という視点から、比較・対照し、考察していくことにしよう。

日本語においては単数、複数が形態的に区別されていないので、わかりにくいですが、ドイツ語の表現においては“Ohr”が単数形で用いられている表現については、「聴覚能力」あるいは「判断能力、精神、人格等」を意味するものであると理解していい。

意味論的な次元では、ドイツ語においては身体部位としての「耳」を意味している表現が日本語の2倍以上ある。逆に換喩的に「耳」が「人間」を意味している表現は、日本語に多い。聴覚能力を意味している表現において日独の差が大きい。日本語はドイツ語の約3倍近い。

語用論的な次元ではどうであろうか。ドイツ語においてはポジティブな意味、価値判断を伴って使用される表現が日本語の3倍近く存在する。ニュートラルな表現は、日本語がいくらか多い。ネガティブな意味、価値判断を伴って使用される表現は、いずれの言語においても、ほぼ同じぐらいの割合で存在する。

#### 4 ドイツ語学習・教授法の観点からの考察

ドイツ語学習・教授法という観点からは、言語理解つまりドイツ語のイディオム表現を理解するという場合と、言語産出つまりドイツ語のイディオム表現を使うという場合に分けて、考察することができよう。

まず、ドイツ語のイディオム表現を理解するという観点からは、どのようなことがいえるだろうか。日独のイディオム表現が、その表現形式およびイディオム表現としての意味も同じといったものは、理解においてそれほど困難は生じない。たとえば、“die Wände haben Ohren” (2-68) と「壁に耳」(1-58)、“vor jmdm. seine Ohren verschließen” (2-11) と「耳を塞ぐ」(1-46)、“jmdm. sein Ohr leihen” (2-16) と「耳を貸す」(1-34)、“jmdm. zu Ohren kommen” (2-48) と「耳に入る」(1-20)、“zum einen Ohr hinein-, zum anderen wieder hinausgehen” (2-49) と「右の耳から左の耳へ」(1-74)といったものである。これらの表現は、逆方向である産出の両面においても、それほど困難は生じない。

“seinen Ohren nicht trauen” (2-24) と「耳を疑う」(1-30) もそれほど困難は生じないと思われるが、伴っている動詞が異なっている。ドイツ語の方は「信じられない」と否定的表現だが、日本語の方は同じ意味であっても「疑う」と積極的な表現を用いている。“Watte in den Ohren haben” (2-69) は、「耳を塞ぐ」ということで理解できるだろう。耳を手で覆うか、耳栓をするかを問わず、聞くまいとする姿勢に変わりはない。“ein feines Ohr für etwas haben” (2-12) と「耳が肥える」(1-3)、「耳を肥やす」(2-38) は、修練、修行の到達点、結果に焦点を合わせて表現しているか、修練、修行そのものを表現しているかという違いはあるが、「耳がいい」つまり「鑑賞、判断能力がすぐれている」という点では同じである。

“wo hast du deine Ohren?” (2-22) は、日本語ではイディオム表現というわけではないが、「どこ

に耳を持って(つけて)いるのか?」「耳がある(ついている)のか?」という、日常よく聞かれる表現であるので、理解において困難はないだろう。“jmdm. etwas in die Ohren blasen” (2-35)に対応する日本語の表現は「吹き込む」であろう。「耳」を伴っているわけではないが、「耳」であることは当然のこととして理解されているようである。

“die Ohren spitzen” (注意深く聞く) (2-5)という表現には、「耳を立てる」(聞き耳を立てる) (1-45)が対応することになる。いずれも動物の行動に由来する表現のようである。“die Ohren hängen lassen” (耳をたらす)も動物の行動に由来する表現であるが、日本語においては、それに対応する表現としては「肩を落とす」ということになるだろう。

“dem Teufel ein Ohr abschwätzen” (2-67)、“dein Wort in Gottes Ohr” (2-71)という表現の存在は、ドイツ語圏がキリスト教文化圏に属していることを示すものといえよう。

次に言語産出という面からは、どのようなことがいえるだろうか。日本語とドイツ語の表現形式と意味が重なっている、あるいは、ほぼ同じようであるものについては、それほど支障なくドイツ語の表現をたぐり出すことができるだろう。たとえば、理解についての例としてあげた「壁に耳あり」と“die Wände haben Ohren”、「耳をかす」と“jmdm. sein Ohr leihen”、「耳を塞ぐ」「耳を覆う」と“vor jmdm. sein Ohr verschließen”等である。「聞き耳を立てる」「耳を立てる」「耳をそばだてる」に対応するのは“die Ohren spitzen”であるが、動詞「立てる」が“spitzen”(尖らす)となることに注意する必要がある。「耳がいい/悪い」というのは、「どの点でいいのか/悪いのか」もう少し詳しく述べる必要がある。字句通りには“ein gutes Ohr haben”ということになるが、聴力については“gut/schlecht hören”と表現する。形容詞で表現する場合には、“hellhörig/schwerhörig”という対立になる。ただし“hellhörig”は“gut”よりももっと聴力がいい、情報収集能力がいいという意味になり、単に「耳がいい」というよりも、「耳が早い」「耳ざとい」ということになる。“ein scharfes Ohr haben”ということもできる。音楽の鑑賞能力ということになると、“ein feines Ohr haben”となり、形容詞が異なってくる。「耳に入る」「耳にする」は“zum Ohr kommen”である。「耳が痛い」というのは、日本語ではイディオム表現であるが、ドイツ語にはイディオム表現としての対応表現はない。“das tut mir weh.”というよりほかないようである。「耳寄りな話」も、同様にドイツ語では“eine gute Nachricht”いうふつうの表現になる。

「耳を洗う」「耳を滌(すす)ぐ」といった表現に対応するドイツ語の表現はない。イディオム表現としての意味を取ってドイツ語で表現するしかないであろう。「地獄耳」については、『成語林』の説明は「一度聞いたことは決して忘れない」となっているが、近年は「都合の悪いことはいち早く聞きつける。だからその人のうわさ話はできない。」といった意味でも理解されているようである。ドイツ語では“Ohren wie ein Luchs haben”というぐらいであろうか。

日本語の「耳」に関するイディオム表現は、仏教あるいは儒教的な教えを含むような言い回しが多いが、それらを直接的にドイツ語に置き換えることはできない。説明的、解釈的に表現する

ことで切り抜けるしかない。

## 5 おわりに

人間言語は初原的には音声言語であり、書記言語は人類の歴史においては最近のことだと、「はじめに」で述べた。文字を持たない言語は数多く、現在においても文字を有している言語の方が少ない。人類の知恵は、長い間口移しに伝えられ、そして口承文学が栄えたのである。人類は、長い間、耳に依存してきたといえる。

しかし、文字の発明は革命的であった。書記言語の誕生は、人間の言語活動のみならず、文化を大きく展開させることになった。感覚器官としての「目」に依存する率が大きくなった反面、「耳」が持つ聴覚の役割は後退していった。「聞き分ける」ことは少なくなり、「見分ける」ことに多く比重が置かれるようになった。まさに「百聞は一見に如かず」ということになってきたのである。

その「目」依存は、とりわけ日本語に特徴的であるようである。中国から5世紀にきた漢字は、その後の日本語の展開に大きな影響を及ぼした。よかれ悪しかれ、明治期における西洋文化の移入に伴って発明された多くの漢字語は、日本語の視覚依存を決定的にした(高島 2003参照)。現代日本語に保存されている「耳」に関するイディオム表現は、そのような日本語について何を告げてくれるのだろうか。ドイツ語の“Ohr”を構成要素とするイディオム表現は、ドイツ語、ドイツ文化について、何を告げてくれるのだろうか。

最後に“Ohr”に関するイディオム表現を含んでいるウィットを掲げて、本論文を終えることにしよう。

Eine Frau versucht schon seit geraumer Zeit, einen Kellner auf sich aufmerksam zu machen, um ihre Bestellung aufzugeben. Als der endlich erscheint, fragt sie ärgerlich: **“Haben Sie keine Ohren, Herr Ober?”** “Aber ja, meine Dame. Mit oder ohne Kartoffeln?” (Kunschmann 2003: 192) (一人のご婦人が、ずっと以前から、注文しようと思って、ウェイターに合図を送っている。ようやくウェイターがやってきたとき、言った。「あなた、耳はないの?」「もちろん、ありますよ。ジャガイモは、添えますか?」)

## 6 注釈

- 1) 以下(学研)とあるのは、『学研国語辞典』(CD-ROM版)による意味の説明である。
- 2) 数値の合計が100%になっていないのは、小数点第2位で四捨五入したからである。以下の数値についても同じである。
- 3) (2-1)という数字は、【資料2】(ドイツ語)における表現の番号である。同様に、(1-1)は、【資料1】(日本語)における表現の番号を意味する。



## 7 参考文献

**DUDEN 1992:** DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

**DUDEN 2001:** Duden Deutsches Universalwörterbuch. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben von der Dudenredaktion. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

『学研国語辞典』(CD-ROM版)。

**Krüßmann/Hoppe 1999:** Dieter Krüßmann/Ulrich Hoppe, 1000 neue Witze zum Totlachen. München: Wilhelm Heyne Verlag. (Heyne Jubiläums Reihe 95)

**Kunschmann (Hrsg.) 2003:** Doris Kunschmann (Hrsg.), Die besten Witze von A-Z. München: Bassermann Verlag.

尾上(編)1992: 尾上兼英(編)『成語林』、旺文社。

高島 2003: 高島俊男『漢字と日本人』、文藝春秋社(文春新書)。

## 8 資料

## 【資料1】日本語における「耳」を構成要素とするイディオム表現

1. 耳が痛い: 自分の欠点や弱点を的確に指摘されて、聞くのがつらい。(d)(-)
2. 耳搔きで集めて熊手で搔き出す: ほんの少しずつ蓄えてきたものを一度に使ってしまうということ。また、収入が少ないのに支出が多いことのとえ。(a)(-)
3. 耳が肥える: 音楽などを数多く聞くにつれて、そのよしあしを判断したり、味わったりする力を持つようになる。(d)(+)
4. 耳が胼胝になる⇒耳に胼胝ができる (c)(-)
5. 耳が遠い: 聴力が弱くてよく聞こえない。年をとったり、病気のせいで耳がよく聞こえない。(c)(-)
6. 耳が早い: 情報やうわさ話などを人より早く聞きつける。聴覚が鋭い。耳ざとい。(d)(±)
7. 耳順う年⇒耳順 (b)(±)
8. 耳取って鼻かむ: (自分の耳をもぎとって鼻をかむという意から) とんでもないこと、とうてい考えられないことをするたとえ。(a)(-)
9. 耳に当たる: 聞いて不快に感じる。聞いてしゃくにさわる。(d)(-)
10. 耳に入れる: わざわざ聞かせる。情報などを知ってもらうために告げる。(c)(+)
11. 耳に釘: 耳に釘を刺すように、相手の弱点や痛いところをつくこと。念のために警告を発しておくこと。(d)(-)
12. 耳に應える: 聞いたことが非常に強く印象に残る。(d)(-)

13. 耳に逆らう：聞いて不愉快に思う。聞く人の気に障る。(d)(一)
14. 耳に障る：聞いていらいらする。耳に不快である。(d)(一)
15. 耳にする：自然に耳にはいる。それとなく聞こえてくる。うわさなどで聞き知る。(c)(±)
16. 耳に胼胝ができる：同じことを何回も聞かされてうんざりする。また同じ話かと嫌になる。(c)(一)
17. 耳に付く：いったん聞いた物音や声がいつまでも気になる。耳に残って忘れられない。聞こえてくる物音や声をうるさく感じる。(c)(一)
18. 耳に付く言は千里に聞こゆ：内緒話や秘密などは広まりやすいものであるということ。(c)(一)
19. 耳に留める：聞いてよく覚えておく。注意して聞く。(d)(±)
20. 耳に入る：自然に聞こえる。自然に聞いて知る。(c)(±)
21. 耳に挟む：聞きつける。ちらりと聞く。聞くつもりもなしにたまたま聞く。(c)(±)
22. 耳に諸々の不浄を聞いて心に諸々の不浄を聞かず：耳ではさまざまな悪や汚れたことを聞いても、心はそれによって影響を受けたり汚れたりすることのないようにすべきであるということ。(c)(±)
23. 耳の正月：耳に快い音楽やおもしろい話を聞いて楽しむこと。(d)(+)
24. 耳の楽しむ時は慎むべし：耳に心地よい音楽やお世辞を聞いて気分がよいときは、それによって言動の判断を誤ることがあるから、警戒すべきであるといういましめ。(d)(±)
25. 耳は容れ物：耳は聞いて得た情報や知識をしまっておく所であるということ。また、耳は聞いて蓄えておくだけで何もしないから、何の役にもたたないということ。(d)(一)
26. 耳は聞き役、目は見役：(耳は聞き、目は見るというように役割をそれぞれ分担しているという意から)よけいなおせっかいをするなといういましめ。(c)(±)
27. 耳は大なるべく口は小なるべし：情報や知識はできるだけ広い範囲から聞いて得ておくほうがよいが、他人に言うときは遠慮ぎみに話すほうがよいという教え。(c)(±)
28. 耳より入りて口より出ず：人から聞いた知識や学問などを、すぐに物知り顔にぺらぺらとしゃべること。人からいいことを聞いても少しも身につかず、また実践の伴わないことをいう。(a)(一)
29. 耳を洗う：世俗的な出世や栄達にまどわされず、自分を清く保つことのたとえ。(d)(±)
30. 耳を疑う：自分の耳がおかしいのではないかと疑うくらい、聞いたことが信じられない。あまりに意外なので、聞き違いではないかと思う。(c)(±)
31. 耳を打つ：相手の耳に口を近づけてこっそりと話す。(a)(±)
32. 耳を覆う：自分の耳を手でふさいで聞かないようにする。(耳を塞ぐ)(c)(一)
33. 耳を掩うて鐘を盗む：良心に恥じるような悪事を行いながら、無理にそれを意識しないよう

にするたとえ。(d)(-)

34. 耳を貸す：人の話を聞く。(c)(±)
35. 耳を傾ける：熱心に聞く。(c)(±)
36. 耳を借りる：相手の耳に口を近づけてささやく。(a)(±)
37. 耳を撥(くすぐ)る：聞いて喜ぶようなことをいう。(d)(-)
38. 耳を肥やす：耳に快いことを聞いて喜ぶ。質の高い音楽などを聞いて鑑賞力を高める。(d)(+)
39. 耳を信じて目を疑う：人のいうことは信じるが、自分の目を見たことは疑ってかかる。(c)(-)
40. 耳を滌(すす)ぐ：世俗の榮譽を避けて、自分で自分の身を清らかに保つことのとえ。(d)(±)
41. 耳を澄ます：わずかな音や声も聞きもらさないようにと注意を集中して聞く。(d)(±)
42. 耳をそばだてる：わずかな物音や声ものがすまいと一心に聞く。(c)(±)
43. 耳を揃える：金銭を必要なだけ全額用意する。不足なく用意する。(a)(±)
44. 耳を貴び目を賤(し)む⇒耳を信じて目を疑う。(c)(±)
45. 耳を立てる：よく聞きとろうとして注意して聞く。(聞き耳を立てる)(c)(-)
46. 耳を塞(ふ)ぐ：手などで耳をふさいで聞こえないようにする。(c)(-)
47. 耳順：60歳のこと。(b)(±)
48. 耳朶(た)に触れる：耳にはいる。聞こえてくる。(a)(±)
49. 耳目となる：ある人の耳や目の代わりとなって働き、手助けすること。(a)(+)
50. 耳目を驚(おど)かす：世間の人々を驚かす。(b)(±)

#### 語中に「耳」を含むイディオム表現

51. 石に耳あり：秘密の話などのもれやすいたとえ。「石に耳」とも。(b)(-)
52. 後ろの耳、壁に耳：悪いことは本人の気づかないところで他人に知られるもので、いつまでも隠しきれないということ。(b)(-)
53. 馬の耳に風：いくら説明や意見をしてもいっこうに効きめのないこと。(a)(-)
54. 馬の耳に念仏：意見や忠告、教訓などをいくらしても全く効き目のないことのとえ。また、相手に興味のないものを与えてもしかたがないことのとえ。(a)(-)
55. 潁水(えいすい)に耳を洗う：自分の行いを清く保つことのとえ。また、世俗の榮達をひどく嫌うことのとえ。(d)(±)
56. 牆(かき)に耳あり：(あたかも垣に耳があるかのように内緒の話が外にもれてしまうことで)言動に油断してはならないといういましめ。(b)(-)
57. 風の耳を過(す)ぐるが如し：人の意見や忠告を聞き流して心にとめないこと。何をいわれても平気な顔をしていること。(a)(-)

58. 壁に耳：秘密にしていることは、どこでだれに聞かれたり見られたりしているかわからないということ。(壁に耳あり障子に目あり)(b)(一)
59. 聞く耳持たぬ：相手の言うことを聞こうとする態度がない。(d)(一)
60. 賢者は長い耳と短い舌を持つ：賢い人は他人の言うことをよく聞き、言わなくてもいいようなことは言わない。(c)(+)
61. 至言は耳に忤(さから)う：道理にかなった最高のことばは、また人々の耳にとっては最も聞きづらいものである。(d)(±)
62. 地獄耳：一度聞いたことは決して忘れない。(c)(一)
63. 疾雷(しつらい)耳を掩うに及ばず：相手の行動がたいそう速くて防ぐいとまのないこと。(c)(±)
64. 耳聞は目見に如かず：耳で聞くよりは目で見の方が間違いがないということ。(c)(±)
65. 迅雷(じんらい)耳を掩うに暇あらず：事が急で、それに対処する間がないことのとたとえ。(c)(±)
66. 善苗また耳に逆らう：よい苗はのちにより実を結ぶが、のちにより結果をもたらす忠告は、これを聞くものにとっては快いものではないので、無視されがちである。(d)(±)
67. 忠言は耳に逆らう：まごころを尽くしていさめることばは、とかく耳に痛いものであるということ。(d)(±)
68. 天に口あり地に耳あり：秘密や悪事は人に知られやすいということのとたとえ。(b)(一)
69. 天に耳なしと雖も之を聞くに人を以てす：秘密や悪事は、必ずだれかの耳にはいり、自然に世間に知れわたるものである。(b)(一)
70. 徳利に口あり、鍋に耳あり：身近な道具にも口や耳があるように、どこにでも人の口や人の耳はあり、秘密はもれやすいものであるということのとたとえ。(a)(一)
71. 流れに耳を洗う：ひとり身を清くして世俗からのがれるたとえ。(d)(±)
72. 人の耳は壁に付き、眼(まなこ)は天をかける：自分では隠し通したと思っていることでも、いつもだれかがどこかで見たたり聞いたたりしているものだ。隠しごとは決してできないというたとえ。(a)(一)
73. 昼には目あり夜には耳あり：(昼は人の目が光っているし、夜は耳をそばだてて聞いている人がいるの意から)とかく隠し事はすぐに漏れてしまうことのとたとえ。(b)(一)
74. 右の耳から左の耳：本気で聞いていないので、聞いたことをつぎつぎに忘れてしまうこと。(a)(一)
75. 目から入って耳から抜ける：ただ見ただけで、なんの知識にもならず身につかないことのとたとえ。(a)(一)
76. 目に秋毫の末を察すれば耳に雷霆(らいてい)の声を聞かず：小さいことに気を取られて大

きな事がなおざりにされるたとえ。(c)(一)

77. 目に信じて耳に信ぜぬは凡夫の習い：目の前のことだけに気を奪われて、耳に聞こえる深遠な教えを信じないのは、凡人によくあることだということ。(c)(一)

78. 目は両視すること能わずして明らかに、耳は両聴すること能わずして聡し：何事も一つのことに集中するよう心がけなくては成功しないというたとえ。(a)(±)

79. 猛獣の将に博(う)たんとするや耳を弥(た)れて俯伏す：事をなさんとするときには、かえってそれらしいようすを見せないようにしたほうがよいというたとえ。(a)(±)

80. 山を違(さ)ること十里にして蟋蟀(けいこ)の声猶耳に在り：どこへ行っても民の声は耳に入ってくるから、国を治めるものはその声にこたえる政治をしなくてはならないということ。(c)(±)

81. 善い事は耳で聞かず心で聞け：他人の善行の話を目で聞くだけではなく、心の底から感じ入って聞けば、自分もよい行いができるようになるという教え。(c)(±)

## 【資料2】ドイツ語における“Ohr”を構成要素とするイディオム表現

1. ganz Ohr sein (ugs.): gespannt, mit ungeteilter Aufmerksamkeit zuhören  
(全体が耳である：緊張して、気を逸らさずに聞く)(c)(+)
2. jmdm. klingen die Ohren (ugs.): jmd. spürt, dass in seiner Abwesenheit über ihn gesprochen wird  
(耳に鳴り響く：自分がいなくて話題にされていると感じる)(a)(±)
3. Ohren wie ein Luchs haben: sehr gute Ohren haben, sehr gut hören  
(大山猫のような耳を持っている：非常にいい耳を持っている)(c)(+)
4. die Ohren aufmachen/aufsperrn/auftun (ugs.): genau, aufmerksam zuhören  
(耳を開く：正確に、注意して聞く)(c)(±)
5. die Ohren spitzen (ugs.): aufmerksam lauschen  
(耳を尖らす：注意深く聞く)(a)(+)
6. die Ohren steif halten (ugs.): nicht den Mut verlieren  
(耳を固く保つ：勇気を失わない)(d)(+)
7. die Ohren hängen lassen (ugs.): niedergeschlagen sein  
(耳をたらす：打ちのめされる、敗北する)(a)(一)
8. sich nicht die Ohren brechen (ugs.): sich nicht übertrieben abmühen, keinen zu großen Aufwand treiben  
(耳を破らない：大げさながんばりをしない)(a)(±)
9. die Ohren auf Durchfahrt/Durchzug stellen (ugs.): sich etwas anhören, es aber nicht beherzigen, es gleich wieder vergessen

- (耳から通り抜けるようにする：聞いても、記憶にとどめない) (c) (－)
10. die Ohren auf Empfang stellen (ugs.): genau, aufmerksam zuhören  
(耳に入るようにする：正確に注意して聞く) (c) (+)
11. vor jmdm. seine Ohren verschließen (geh.): jmds. Bitten gegenüber unzugänglich sein  
(誰かに対して耳を閉ざす：誰かの願いを聞き入れない) (d) (±)
12. ein feines Ohr für etwas haben (ugs.): ein feines Empfinden für etwas haben  
(何かに対していい耳を持っている：何かをよく感受する) (d) (+)
13. ein Satz heiße/rote Ohren (ugs.): Ohrfeigen, Prügel  
(熱い／赤い耳一発：びんた) (a) (－)
14. es gibt [gleich] rote Ohren (ugs.): Drohrede  
(赤い耳になるぞ：脅し文句) (a) (－)
15. lange/spitze Ohren machen (ugs.): neugierig lauschen  
(耳を長くする／尖らす：興味深く聞く) (a) (±)
16. jmdm. sein Ohr leihen (geh.): jmdm. zuhören  
(誰かに耳を貸す：誰かのいうことに耳を傾ける) (d) (±)
17. jmdm. ein geneigtes Ohr leihen/schenken (geh.; veraltend): jmdm. wohlwollend zuhören  
(誰かに適切な耳を貸す／与える：誰かのいうことを好意を持って聞く) (d) (+)
18. bei jmdm. ein geneigtes (geh.; veraltend)/offenes/williges Ohr finden: feststellen, erreichen, dass jdm. bereit ist, sich mit einem vorgebrachten Anliegen zu befassen  
(適切な／開かれた／好意的な耳を見つける：申し立てた案件に取りかかる用意がある) (d) (+)
19. jmdm. die Ohren voll jammern (ugs.): jmdn. durch ständiges Klagen belästigen  
(誰かに対して耳一杯に嘆く：絶えず嘆くことによって誰かを苛む) (d) (－)
20. jmdm. die Ohren voll blasen/schwätzen (ugs.): jmdn. durch ständiges Reden [über eine bestimmte Sache] belästigen  
(誰かに対して耳一杯におしゃべりする：絶えずしゃべることによって誰かを苛む) (d) (－)
21. jmdm. die Ohren lang ziehen (ugs.): jmdn. tadeln, [scharf] zurechtweisen  
(誰かの耳を長く引っ張る：誰かを叱責する) (a) (－)
22. wo hast du deine Ohren? (ugs.): hörst du nicht, was man dir sagt?  
(どこに耳を持っているのか：人が言うことを聞いていないのか?) (c) (－)
23. tauben Ohren predigen: mit seinen Ermahnungen nichts erreichen  
(聞こえない耳に説教する：警告しても甲斐がない) (d) (－)
24. seinen Ohren nicht trauen: von etwas, was man gehört hat, völlig überrascht sein

- (自分の耳を信用しない：聞いたことによって、仰天してしまう) (c) (±)
25. auf den/auf seinen Ohren sitzen (ugs.): sich schlafen legen  
(耳に据わる：就寝する) (a) (－)
26. auf diesem/dem Ohr schlecht/nicht hören (ugs.): von einer bestimmten Sachen nichts wissen wollen, einem bestimmten Anliegen ablehnend gegenüberstehen  
(この耳では聞こえが悪い：あることを知ろうとしない、あることを拒否する) (d) (±)
27. für jmds. Ohr[en] in bestimmter Weise klingen: sich für jmdn. in bestimmter Weise anhören  
(誰かの耳にとって特定のやり方で響く：誰かのために特定のやり方で聞いてあげる) (b) (±)
28. für jmds. Ohren bestimmt sein: dafür bestimmt sein, dass es jmd. hört  
(誰かの耳のために定められている：誰かが聞き届けられるべく定められている) (b) (±)
29. nichts für fremde Ohren sein (ugs.): geheim, vertraulich sein  
(他人の耳のためのものではない：秘密である) (b) (±)
30. nichts für zarte Ohren sein (ugs.): zum Erzählen vor empfindsamen [weiblichen] Zuhören nicht geeignet sein  
(やさしい耳のためのものではない：感じやすい人の前で物語るには適切でない) (b) (－)
31. jmdm. eins/ein paar hinter die Ohren geben (ugs.): jmdn. ohrfeigen  
(誰かの耳の後ろに一つ／二、三あげる：誰かのびんたを張る) (a) (－)
32. eins/ein paar hinter die Ohren bekommen/kriegen (ugs.): geohrfeigt werden  
(耳の後ろに一つ／二、三もらう／食らう：びんたを張られる) (a) (－)
33. sich etwas hinter die Ohren schreiben (ugs.): sich etwas gut merken  
(何かを耳の後ろに書く：何かを銘記する) (a) (±)
34. noch feucht/nass/nicht trocken hinter den Ohren sein (ugs.): noch zu jung, unerfahren sein  
(まだ耳の後ろが湿って／濡れている／乾いていない：まだ若く、経験がない) (a) (±)
35. ins Ohr gehen (ugs.): gefällig klingen, sich leicht einprägen  
(耳に入っていく：心地よく響く、記憶にとどめやすい) (d) (+)
36. jmdm. etwas in die Ohren blasen (ugs.): jmdm. etwas einreden  
(誰かの耳に何かを吹き込む：誰かを説き伏せて何かを納得させる) (d) (－)
37. jmdm. im Ohr bleiben: von jmdm. [der es gehört hat] nicht vergessen werden  
(耳にとどまっている：聞いたことを忘れない) (d) (±)
38. etwas im Ohr haben: etwas innerlich hören; sich an etwas Gehörtes erinnern  
(何かを耳に持っている：心の中で聞く、聞いたことを覚えている) (d) (±)
39. jmdm. in den Ohren liegen (ugs.): jmdm. durch ständiges Bitten, Jammern o.ä. zusetzen  
(耳の中にある：懇願、嘆きによって誰かを困らせる) (d) (－)

40. mit den Ohren schlackern (ugs.): äußerst überrascht sein  
(耳ががくがくする: 吃驚仰天する) (a) (±)
41. mit halbem Ohr hinhören/zuhören (ugs.): ohne rechte Aufmerksamkeit zuhören  
(片方の耳で聞く: 注意して聞かない) (c) (－)
42. mit roten Ohren abziehen (ugs.): sich beschämt entfernen  
(赤い耳で引き下がる: 恥じ入って退散する) (a) (±)
43. jmdn. übers Ohr hauen (ugs.): jmdn. betrügen  
(誰かの耳を殴る: 誰かを欺く) (d) (－)
44. bis über die/über beide Ohren verliebt sein (ugs.): sehr verliebt sein  
(両耳の上まで恋している: 非常に恋している) (a) (+)
45. bis über die/über beide Ohren verschuldet sein/in Schulden stecken (ugs.): sehr große Schulden haben  
(耳の上まで借金している: 膨大な額の借金をしている) (a) (－)
46. um ein geneigtes Ohr bitten (geh.; veraltend): um wohlwollendes Anhören bitten  
(適切な耳を願う: 聞き届けてほしいと願う) (d) (±)
47. viel um die Ohren haben (ugs.): sehr viel zu tun haben  
(耳のまわりに多くのものを持つ: 非常にすることが多い、多忙である) (a) (±)
48. jmdm. zu Ohren kommen: jmdm. bekannt werden  
(誰かの耳に届く: 誰かの知るところとなる) (c) (±)
49. zum einen Ohr hinein-, zum anderen wieder hinausgehen (ugs.): sogleich wieder vergessen werden  
(一方の耳から入って、もう一方の耳からまた出ていく: 聞いた途端に忘れる) (a) (－)
50. Arsch mit Ohren (derb): widerlicher oder hässlicher Mensch (S. 52)  
(尻と耳が一緒: 嫌な人) (a) (－)
51. Augen und Ohren aufhalten (ugs.): aufmerksam etwas verfolgen (S. 63)  
(目と耳を開いている: 注意して何かを追う) (c) (±)
52. Bohnen in den Ohren haben (ugs.): [absichtlich] nicht hören (S. 123)  
(耳の中に豆を持っている: [故意に] 聞かない) (a) (－)
53. noch die Eierschalen hinter den Ohren haben (ugs.): noch sehr unerfahren sein (S. 169)  
(まだ耳の後ろに卵の殻を持っている: まだ非常に未経験である) (a) (－)
54. es faustdick hinter den Ohren haben (ugs.): durchtrieben, gerissen sein (S. 195)  
(耳の後ろにこぶし大に持っている: 狡い、抜け目がない) (a) (±)
55. jmdm. das Fell/ (selten auch) die Haut über die Ohren ziehen (ugs.): jmdn. betrügen, ausbeuten, stark übervorteilen (S. 199)  
(誰かの皮を耳の上から引き剥がす: 誰かを欺く、搾取する) (a) (－)



56. einen Floh im Ohr haben (ugs.): nicht recht bei Verstand sein, verrückt sein (S. 213)  
 (蚤を耳の中に持っている: 理性的でない、狂っている) (d) (－)
57. jmdm. einen Floh ins Ohr setzen (ugs.): in jmdm. einen unerfüllbaren Wunsch wecken (S. 213)  
 (誰かの耳に蚤を置く: 叶わぬ願いをかき立てる) (d) (－)
58. jmdm. die Haare/die Ohren vom Kopf fressen (ugs.): auf jmds. Kosten leben und ihn arm machen (S. 285)  
 (誰かの髪を/耳を頭からとって食べる: 誰かの費用で生活して、その人を貧乏にする) (a) (－)
59. Knöpfe in/auf den Ohren haben (ugs.): nicht richtig hören, ein Geräusch o. ä, nicht beachten (S. 393)  
 (耳にボタンを持っている: ちゃんと聞かない、物音などに注意しない) (a) (－)
60. ich steck/setz dir den Kopf zwischen die Ohren! (ugs.): jmdm. gründlich die Meinung sagen, jmdn. scharf zurechtweisen (S. 404)  
 (耳の間に頭を置くぞ!: 誰かに徹底的に意見する) (a) (－)
61. bis über den Kopf/die Ohren in etwas stecken (ugs.): 1. tief, rettungslos in etwas hineingeraten sein. 2. völlig von etwas beansprucht werden (S. 407)  
 (頭の上まで何かにはまっている: 1. 救いようがないほど何かに落ち込んでいる。2. 何かで忙殺されている) (d) (±)
62. von einem Ohr [bis] zum anderen lachen/strahlen (ugs.): mit breit gezogenem Mund lachen (S. 426)  
 (一方の耳からもう一方の耳へと笑う: 大きな口を開けて笑う) (a) (+)
63. [wohl] einen kleinen Mann im Ohr haben (ugs.): [anscheinend] nicht ganz normal sein (S. 474)  
 (耳の中に小さな人を持っているのだろう: 全く普通でないように見える) (d) (－)
64. Musik in jmds. Ohren sein/wie Musik in jmds. Ohren klingen: für jmdn. sehr erfreulich, angenehm [zu hören] sein (S. 498)  
 (誰かの耳には音楽のように響く: 誰かにとっては非常に気持ちいい) (d) (+)
65. sich die Nacht um die Ohren schlagen (ugs.): die ganze Nacht aufbleiben, nicht zum Schlafen kommen (S.501)  
 (夜を耳のまわりでたたく: 徹夜する、寝ない) (a) (±)
66. jmd. hat den Schalk hinter den Ohren: jmd. ist zu Späßen aufgelegt (S. 610)  
 (耳の後ろにいたずら者を持っている: 冗談好きである) (a) (±)
67. dem Teufel ein Ohr abschwätzen (ugs.): ganz besonders beredt und geschwätzig sein (S. 720)  
 (おしゃべりで悪魔の耳を奪う: 非常に雄弁でおしゃべりである) (a) (－)
68. die Wände haben Ohren (ugs.): es kann alles belauscht werden [was wir hier bereden] (S. 779)

(壁に耳あり：すべて聞かれてしまう可能性がある)(b)(-)

69. Watte in den Ohren haben (ugs.): nicht hören wollen (S. 785)

(耳の中に綿を持っている：聞こうとしない)(a)(-)

70. sich den/frischen Wind um die Nase/die Ohren wehen/pfeifen lassen: die Welt und das Leben kennen lernen (S. 806)

(鼻／耳のまわりを風を吹き抜けさせる：世間、人生を知る)(d)(+)

71. dein Wort in Gottes Ohr: sein Wunsch möge erhört werden; was du gesagt hast, möge sich bewahrheiten (S.814)

(君のことばが神の耳に届くように：願いが聞き届けられるように)(a)(+)

#### 意味論的、語用論的分析の結果

		日本語	ドイツ語
意味論的分析	(a)	17 (21.0%)	33 (46.5%)
	(b)	10 (12.3%)	5 (7.0%)
	(c)	30 (37.0%)	10 (14.1%)
	(d)	24 (29.6%)	23 (32.4%)
語用論的分析	(+)	6 (7.4%)	14 (19.7%)
	(-)	39 (48.1%)	32 (45.1%)
	(±)	36 (44.4%)	25 (35.2%)

## Kontrastive Phraseologie Deutsch-Japanisch

— idiomatische Wendungen mit der Hauptkomponente

“Ohr” im Deutschen und “Mimi” im Japanischen —

Yasunari UEDA

Das Ziel der vorliegenden Arbeit besteht darin, zunächst die idiomatischen Wendungen mit den Hauptkomponenten “Ohr” im Deutschen und “Mimi” (Ohr) im Japanischen in Bezug auf die morpho-syntaktischen, semantischen und pragmatischen Eigenschaften kontrastiv zu analysieren. Dann werden aufgrund der Ergebnisse der Analyse einige sprachdidaktische Überlegungen angestellt.

Als Daten für das Deutsche werden insgesamt 71 Wendungen aus dem Lexikon “Duden Redewendungen und sprichwörtlichen Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache” (DUDEN 1992) und für das Japanische insgesamt 81 Wendungen aus dem Idiom-Lexikon “Seigorin” (Ogami 1992) gesammelt.

Semantisch werden die Wendungen in den beiden Sprachen aus folgenden vier Gesichtspunkten betrachtet: (a) Ohr als “Körperteil”, (b) Ohr als “Gehör”, (c) Ohr als “Mensch” und (d) Ohr als “Urteilkraft” u.a. Die Ergebnisse für das Deutsche: (a) = 33 (46.5%), (b) = 5 (7.0%), (c) = 10 (14.1%), (d) = 23 (32.4%) und für das Japanische: (a) = 17 (21.0%), (b) = 10 (12.3%), (c) = 30 (37.0%), (d) = 24 (29.6%). Pragmatisch werden die Wendungen in Bezug auf ihre positive oder negative Konnotation geprüft. Es gibt im Deutschen insgesamt 14 (19.7%) Wendungen mit positiver Konnotation, 32 (45.1%) mit negativer Konnotation. 25 (35.2%) Wendungen werden neutral gebraucht. Im Japanischen werden 6 (7.4%) mit positiver Konnotation, 39 (48.1%) mit negativer Konnotation und 36 (44.4%) neutral gebraucht.

Beim Vergleich fällt auf, dass im Deutschen die Hauptkomponente “Ohr” metaphorisch “Gehör”, “Urteilkraft”, “Persönlichkeit” oder “Geist” bedeutet, wenn es im Singular erscheint. Auf der semantischen Ebene gibt es über doppelt so viele Wendungen im Deutschen, in denen das “Ohr” den Körperteil selbst bedeutet, als im Japanischen. Mit anderen Worten, es gibt im Japanischen mehr Wendungen, in denen das “Ohr” metaphorisch verwendet wird, als im Deutschen. Im Deutschen gibt es einige Wendungen, die auf den Einfluss des Christentums hinweisen (*dem Teufel ein Ohr abschwätzen*, *dein Wort in Gottes Ohr*). Dagegen gibt es im Japanischen einige Wendungen, die buddhistischer (*Mimi wo arau*: das Ohr reinigen) und konfuzianischer Herkunft (*Mimi ni sitagau toshi*: das Alter, in dem man dem Ohr folgt) sind.